



仲道郁代

ピアノ・リサイタル

前奏曲

—永遠への兆し—

2022年10月29日 東京文化会館 小ホール

The
Ikuyo
Nakamichi
Road
to
2027

PROGRAM

ドビュッシー
前奏曲集 第2巻

DEBUSSY: Préludes, Book 2

- 第 1 曲 霧
- 第 2 曲 枯葉
- 第 3 曲 酒の門
- 第 4 曲 「妖精たちはあでやかな踊り手である」
- 第 5 曲 ヒース
- 第 6 曲 風変りな「ラヴィエヌ將軍」
- 第 7 曲 月あかりの謁見のテラス
- 第 8 曲 水の精
- 第 9 曲 ピックウィック殿をたたえて
- 第 10 曲 カノープ
- 第 11 曲 交代する 3 度
- 第 12 曲 花火

ラフマニノフ
前奏曲集 Op. 23 より

RACHMANINOFF: 10 Preludes, Op. 23: No. 2, No. 5, No. 7

- 第 2 曲 変ロ長調
- 第 5 曲 ト短調
- 第 7 曲 ハ短調

ラフマニノフ
前奏曲集 Op. 32 より

RACHMANINOFF: 13 Preludes, Op. 32: No. 2, No. 5, No. 8, No.10, No.11, No.12

- 第 2 曲 変ロ短調
- 第 5 曲 ト長調
- 第 8 曲 イ短調
- 第 10 曲 ロ短調
- 第 11 曲 ロ長調
- 第 12 曲 嬰ト短調

ラフマニノフ
前奏曲 Op. 3-2 〈鐘〉 嬰ハ短調

RACHMANINOFF: Prelude, Op. 3, No. 2

「前奏曲 ―永遠への兆し」

曲目解説 松橋麻利

C. ドビュッシー

ドビュッシーのピアノ作品の一つの頂点である2巻の《前奏曲集》は、全24曲から成ります。第2巻は、前巻と同じく外界の事象から着想されていますが、響きがより斬新になっています。その理由の一つは、当時パリで初演されたストラヴィンスキーのバレエ音楽《ペトルーシユカ》や《春の祭典》の新奇なリズムや衝撃的な響きからの影響と思われる。

前奏曲集 第2巻 (1911-13)

第1曲：霧（適度な速さで）：白鍵と黒鍵の半音違いの音がむらなく衝突し合って茫漠とした響きをつくります。アルペッジョの合間に増4度違いで強打される和音は、この曲の打ち消しあう響きを象徴しています。

第2曲：枯葉（ゆっくりと郷愁を誘うように）：衰退する自然と、過去への人間の哀惜を重ねてうたうG、ムレの詩、あるいはヴェルレーヌの詩「秋の歌」などが靈感源という説があります。

第3曲：酒の門（“ハバネラ”のテンポで）：スペインのアルハンブラ宮殿のある門を写した絵葉書の光と影のコントラストが刺激となったようです。ハバネラのリズムを背景に「極端な激しさと情熱的な心地よさ」が対比されます。

第4曲：「妖精たちはあでやかな踊り手である」（急速にそして軽く）：イギリスの挿絵画家A.ラッカム

による同名の挿絵に触発されました。そこではバッタとクモの伴奏にのって、妖精がクモの糸の上で軽やかに舞っています。

第5曲：ヒース（静かに一穏やかに表情豊かに）：ヒースは、イギリスの荒地か、あるいはそこに群生する薄紫色の花でしょうか。第1巻の〈亜麻色の髪の乙女〉に通じる優しさをもっています。

第6曲：風変わりな「ラヴィーヌ將軍」（ケイクウォークのスタイルとテンポで）：1910年代の初めにマリニ劇場に出演していたピエロの姿から想を得たようです。最初の「かん高い」装飾的な3音はファンファーレか、道化の引きつった高笑いか、それとも彼が吹く警笛でしょうか。それにケイクウォークが組み合わせられます。

第7曲：月あかりの謁見のテラス（レント）：イギリスのジョージ5世のインド皇帝戴冠を報告する

文章の中にタイトル源になった語句があったようです。冒頭にフランス民謡《月の光に》の最初の一節が使われて、幽玄な“夜の音楽”が展開されます。

第8曲：水の精（スケルツァンド（たわむれるように））：第4曲と同じ画家ラッカムが、ドイツの詩人ラ・モット＝フーケの童話『ウンディーネ（水の精）』に描いた挿絵によります。哀しいながらも小悪魔的なきらめきを合わせもつ水の精が描かれます。

第9曲：ピックウィック殿をたたえて（グラーヴェ（厳かに））：「ピックウィック殿」とは、作曲者が愛読していたというイギリスの作家ディケンズの小説『ピックウィック・クラブ遺文録』の主人公です。イギリス国歌と馬車の動きを表わす細かい付点リズムが組み合わせられ、最後に「遠くで軽く」主人公の口笛が聞こえます。

第10曲：カノーブ（とても穏やかに、そして悲しげに）：「カノーブ」とは、古代エジプトでミイラ

S. ラフマニノフ

作品番号のない前奏曲を除き、ラフマニノフもすべての調を網羅する24の前奏曲を書いています（Op.23の10曲、Op.32の13曲、Op.3-2）。それらは、ショパンの前奏曲を真に受け継ぐ内心の魂の音楽といえましょう。

前奏曲集 Op.23 (1901-03) より

第2曲 変口長調（荘厳に）：左手のアルペッジョの上で堂々としたファンファーレのようにも聞こえる前後の部分と、左手が作曲者らしい抒情的な旋律を浮かび上がらせる中間部が対比されます。

第5曲 ト短調（1901）（行進曲風に）：悲壮感をたたえた行進曲と、中間部の暗くこもった抒情が忘れがたい印象を作り出します。

第7曲 ハ短調（アレグロ）：ショパンの練習曲「革命」に似た激しさをもつ音型で始まりますが、浮かび上がる旋律は紛れもなくラフマニノフのメランコリーです。

前奏曲集 Op.32 (1910) より

第2曲 変口短調（アレグレット）：シチリアーノ風の特徴的な付点リズムが底流となっていますが、中間の「アレグロ」は本来のシチリアーノにはない激しい高まりを見せます。

第5曲 ト長調（モデラート）：一転して、のどかで静謐な大気が漂う極上のひとときです。作曲者らしい抒情が展開していくなかで、32分音符の装飾的な楽句が美しく華を添えます。

第8曲 イ短調（ヴィーヴォ（活発に））：簡潔です

を作る際に死者の内臓を入れるのに使われた壺のことです。ドビュッシーは仕事机の上にこの壺の頭部を飾っていました。なんとも言えない沈痛な雰囲気 に満ちた曲です。

第11曲：交代する3度（ほどよく活気づいて）：2巻の《前奏曲集》のなかで抽象的な素材を対象にした唯一の曲。3度和音だけで、12音、調性的な部分、全音音階、半音階、複調といった多様な響きが展開されます。すでに次の《練習曲集》(1915)の世界を指向しています。

第12曲：花火（ほどよく活気づいて）：〈霧〉と同じく黒鍵と白鍵の衝突が作り出すくすんだ大気の中で、3連の音型が音の花火となって輝きます。最後に低くどよめく変ニ長調のトレモロ上で、「ひじょうに遠くから」祝祭日を祝うフランス国歌《ラ・マルセイユーズ》が切れ切れ聞こえ、花火もまだ小さく上がるという心憎い演出があります。

が、急速で技巧的なトッカータといえましょう。

第10曲 口短調（レント）：ベックリンの絵「帰郷」から着想したといわれます。壮大な曲想からも、和声書法からも嬰ハ短調の前奏曲に通じるものがあり、中間部では鐘も聞こえます。

第11曲 口長調（アレグレット）：揺れる付点リズムは、ここでは簡素であどけないというまったく違う表情を与えられています。

第12曲 嬰ト短調（アレグロ）：作曲者が好んで演奏した前奏曲の一つ。きらめく音の帯のような分散和音が繊細で美しい詩情を浮かび上がさせます。

前奏曲 Op.3-2 〈鐘〉嬰ハ短調（レント） (1892)

5曲の《幻想的小品集》(Op.3)の第2曲として書かれました。ラフマニノフはこの曲で一躍有名になり、つねに弾くことを求められました。ユニゾンの強い開始音のあと、憂愁に満ちた平行和音が最弱音で鐘のように打ち鳴らされます。下行半音階による悲哀に満ちた中間部がクライマックスへと上りつめ、厚い響きの再現部を経て、最後は主音の持続低音上で和音が色を変えながら弔鐘のように鳴りわたります。



第4曲 ラッカムの挿絵
（『ケンジントン公園のピーター・パン』より）



第8曲 ラッカムの挿絵
（『ウンディーネ』より）



第10曲 カノーブ
（紀元前900～800年、
ウォルターズ美術館所蔵）

鼎談 前奏曲—永遠への兆し



仲道郁代 × 亀山郁夫 × 松橋麻利

構成：柴田克彦

仲道郁代が自身の芸術性がすべて表れると語る「The Road to 2027 リサイタル・シリーズ」。ピアノズムの新境地に挑む秋のシリーズでは、昨年の「幻想曲の模様」（東京文化会館）が令和3年度文化庁芸術祭の「大賞」を受賞するなど、ますます注目が高まってきている。本年のテーマは「前奏曲—永遠への兆し」。ドビュッシーとラフマニノフ、それぞれの前奏曲から何が見出されるのか。ドビュッシー研究家の松橋麻利氏と、ロシア文学者の亀山郁夫氏をむかえて語り合った。

ドビュッシーの前奏曲集から
ラフマニノフへ

仲道 今日は「The Road to 2027」の秋のシリーズで取り上げます、ドビュッシーとラフマニノフの前奏曲について、お話をさせていただきたいと思います。

まずは年上のドビュッシーから。今回は《前奏曲集》第2巻を演奏します。私から見ると、第2巻は第1巻よりも無重力といえますか、浮き上がっているような作品ばかりで、緊張と弛緩というクラシック音楽が培ってきた在り方から離れた世界。演奏していて、とても緊張を強いられます。第1巻と第2巻で描こうとしているものの見方が違うような気がするのですが、松橋先生いかがでしょうか？

松橋 描こうとしている方向性はさほど変わらないのですが、使っている語法が違ってきますね。第2巻の方が、伝統から離れた和声とい

ますか、3度の積み重ねによる和音のほかに、和声外音というものをたくさん使っていて、そこがまず第1巻とは違う点。それから小節線で区切られる拍動を超えたりリズム、例えば拍の最後の短い音を次の拍の長い音に繋げて拍動感を消してしまう。すると通常のシンコペーションの効果とは違って、何かが消え去っていくような感じになります。そうした拍に対する考え方の違いも大きいと思います。

仲道 確かに、1曲1曲で表出しているのは、空気中の何かや人の様子など、第1巻も同じでした。でも第1巻はその空気の粒子が音や色彩になっているケースが多いのに対し、第2巻はリズムや輪郭をぼかすことが多いような気がします。例えば1曲目〈霧〉の、ターナーの絵のような「ぼかした感覚」など、語法が豊かでいろいろなものを試している。

〈交代する3度〉の3度の積み重ねでも運動性そのものが世界観を作っていて、画家がキュビズムに変わっていくのと通じるような変貌を感じます。それにオリエンタルな音使いもあります。そこには日本の版画や浮世絵などの影響もあったわけで、かなり多彩な文化を取り入れている。この時代は、ロシアのバレエなども入ってきているわけですね。

松橋 そう、1909年にディアギレフのロシア・バレエ団ができて、《前奏曲集》が書かれたのはストラヴィンスキーがパリで三大バレエを初演する頃。特に第2巻はその影響をかなり受けていますね。

仲道 だから《ペトルーシュカ》に似た音使いが出てくる。

松橋 そうした影響は随所に表れています。

仲道 そのあたりのロシアとフランスの関係について、亀山先生はどうお考えになりますか？

亀山 ラフマニノフが登場したのは、ロシアの芸術全体が大形式から小形式に移る時代です。大形式といえは、文学ではトルストイ、音楽ではチャイコフスキーが代表格でしょうか。ラフマニノフが登場した1890年代は、皇帝アレクサンドル2世が暗殺されてから10年。ロシア社会はとても鬱屈していて、政治的な発言をすると危ない。そこで芸術家たちは内面の世界に沈潜し、ロマンティックな夢を膨らませる。それは大掛かりなものではなく、小さな形式による自己主張を志すことになります。こうして1890年代以降のロシア芸術全般が、小説から詩のジャンルに移っていく。そこに最も影響を与えたのがフランスのサンボリズムです。当然ラフマニノフもそうした潮流を意識していて、自分はドビュッシーや他のヨーロッパの作曲家たちとどう違うのか？ アイデンティティをいかに確保するのか？ との思いがあった。その中で彼の音楽に大きなインパクトを与えたのが、グレゴリオ聖歌の「ディエス・イレ＝怒りの日」のモチーフで、それを生涯に何度も繰り返し使っていく。このモチーフ自体が実は彼自身のアイデンティティであると同時にロシア的なもののサインなんです。ですから前奏曲にもその音階に近いものが出てきます。またサンボリズム、ロシア語でいうシンボリズムは、何よりも宗教的な価値観を大切にしていました。そうした神への憧れや恭順、ロシア的なものと自分自身をどのようにミックスしていくのか、というところがラフマニノフにとっては大きなテーマだったのではないかと思います。

「一瞬の現在」を切り取る
ドビュッシー

仲道 とても興味深いです。では「小さなもの」になぜ向かったのか？ その中に何を見出したかったのかについてお聞きしたいと思います。私の生涯のテーマであるベートーヴェンは、モチーフを展開しながら建造物のように音楽を作っていく作曲家ですから、私もその影響下で考えてしまうわけですが、ラフマニノフもドビュッシーもモチーフ展開がどうなっているのか、よくわからない。もはや違う価値観で作っていますね。そうした小品の世界、前奏曲という形で何かを切り取るというのはどういうことなのでしょう。

松橋 前奏曲というジャンルのでき方が最初から小さいのです。弦楽器奏者なら調弦を兼ねて手慣らしをする、鍵盤楽器奏者なら軽く弾いてテクニックを試してみる。前奏曲はそこから発展しました。ですから自由に即興的に何を入れてもいいわけです。すると前奏曲には、作曲家の素のままの姿が出る可能性がある。その歴史があるので、前奏曲を書こうとする作曲家は、正直に自分や自分の感覚を投影できるジャンルとみていたのではないかと思います。

仲道 第2巻には、物質が水蒸気になってしまったような〈霧〉や、生を失ったような気配のある〈枯葉〉、古代からの永遠を聴く〈カノーブ〉など、幻想や、現実にはない世界が描かれています。

松橋 それはたぶんドビュッシーが感じている「幻影」ですね。何かきっかけがあって、そこから幻影を広げ、音で表現する。そうしてできたのが《前奏曲集》だと思います。

仲道 ドビュッシーはすごい感覚の

持ち主。お客様の細かな感覚を開いて聴いていただけるように弾くのは、怖いくらいに難しい。ピアノという楽器で、さまざまなタッチやペダルなどを駆使しながら、あたかもそこに浮かび上がるかのような世界を音で作ってしまうのですから。

松橋 まさしく音で描き、納得させる、音で作ったのは彼が見ていた幻影そのもの。しかし聴いている人にも見えて、共感できてしまう。

仲道 その景色を見たことがなくても、きっとこうなのだろうという肌感覚を与えてくれます。でも私は、ドビュッシーの音楽の中には時の流れがなくて、まるで止まっているような、切り取られた時間や世界で曲が進んでいくように感じます。

松橋 彼はその切り取られたものを「一瞬の現在」にする。それをそこに存在するもの、今あるものにしてしまうわけです。

「神」に捧げるラフマニノフ

仲道 一方ラフマニノフでは、作品を弾いていると、モチーフがひとつしかないような気がします。それまでのロシアが巨大な芸術を生んできた中、ひとつのファクターで曲を作るというのは一体どういうことなのでしょう？

亀山 松橋先生はドビュッシーの前奏曲が「切り取られた現在」だと言われましたが、その「現在」がラフマニノフの場合には全く別の観点から意味づけられています。それは大地の観念と結びついた「神」だということです。1890年代の鬱屈の中で、運命論のようなものが多く出てきますが、そこには人間の所業は非常にむなしいものだといった感覚がある。ベートーヴェン的な構築性、す





なわち人間の意思そのものを否定し、神に支配されている感覚を表していくためには、どうしても小さな形式に頼らざるをえなくなる。そういった宗教儀式的な観念、いわばひとつの捧げものですね。だからラフマニノフにおける前奏曲のひとつひとつが、神と自分しかいない世界といったイメージで作られているのではないかと思うのです。

仲道 ラフマニノフの前奏曲はどれも孤独で、人に聴かせようと思って弾いている感覚がないんです。お話を伺って、それは神の存在に拠るのかなと思いました。彼の曲はロマンティックに聴かれることが多いですし、私自身、今回取り組むまでそうした彼の宗教性は意識していなかったのですが、実際に弾いてみると孤独感や悲しさを感じます。つまり、神やロシアへの思いを小さな形に切り取って描いたということですね。

ドビュッシーとラフマニノフの精神性

仲道 こうした音楽による救いのような部分は、ドビュッシーにもあるのでしょうか？



松橋 それがドビュッシーは自分の中にあるものを吐き出すことや、それと対話するといったことが一切ないのですよね。内面を語らない。

仲道 本当にそうですね。ドビュッシーの音楽には主語がない。なぜそうなったのでしょうか？

松橋 ある哲学者は「そこに羞恥を感じている」と述べています。自分を語ることに恥ずかしさを感じている。だからそのまま出さない。それを全面に出したロマン派の音楽への反発もあるでしょうし、フランス人はそういうことを嫌いますから、この国の作曲家としての在り方を打ち出す姿勢でもあるのでしょう。

亀山 ラフマニノフに関して言うと、ラフマニノフが曲を書けなくなってしまうのは、自分を押し出そうという自我、抒情的な一人称を、ドビュッシーを嚆矢とした、20世紀の音楽の潮流がせき止めていたことが背景にあるのかもしれませんが。ラフマニノフは、もう少し早く生まれていれば、別のサイクルを歩むことができたと思うのですが、20世紀のヨーロッパ音楽がたどった進化の歴史に、彼自身の才能が塞ぎとめられてしまった。そういう意味では非常に不幸な作曲家だといえます。

仲道 そうかもしれませんね。私自身はこれほど多くのラフマニノフ作品を弾くのは初めてなんです。体が小さいこともありますが、私の中にロシア的な歌い回しや息遣いが入ってこなかった。この「The Road to 2027」では、自分の可能性を広げる意図もあるので思い切って選曲しましたが、そこで弾いていると、他の国にはない息の長さを持った独特のフレージングを感じました。これはロシアという国や風土からく

るものなのでしょうか？ 一方のドビュッシーは旋律が短いですね。

松橋 短いです。

仲道 もう本当にかけら。かけらが集まって何かを作っている。なので、そのかけらを見つけて音にすることができたら、自分なりにその世界観を描くことができるのですが、ラフマニノフには、孤独で寂しくて内にこもっていながら、エネルギー感や怒涛のような強さがあります。大体息というのは、悲しい時は短くなるものではありませんか？ その点、ラフマニノフは息が長い……。

亀山 ロシア的な精神性は切断を恐れるのです。ロシア人には、永遠性に対する憧れが強くなるので、形式的には短いけれども永遠が宿するという考え方があるのだと思います。基本的には流れていて、滞っても留まらない。ですから仲道さんの印象はまさにロシア的な精神性だと思えます。

仲道 おもしろいですね。ドビュッシーは一瞬を閉じ込めることによって永遠を見る、ラフマニノフは続いていくということに永遠がある。今回は奇しくも「永遠への兆し」というサブタイトルを付けています。このタイトルは、切り取られたさまざまなことは生きているからこそ見たり感じたりするのであって、前奏曲というのは生を終えた後の世界への前奏曲なのではないか、と考えたからなのですが。

亀山 それは素晴らしい解釈です。

二人の本質とは？

仲道 今回のラフマニノフの前奏曲には〈鐘〉というとても印象的な曲があります。ロシア人にとって鐘の

音は宗教と結びついていて、鐘の音に神を求めるとの話を聞いたことがあります。ですから神というのは、ラフマニノフを弾く時にとても大きな問題だと思います。

亀山 ラフマニノフにとっての神には、永遠的なものに対する憧れが含まれます。熱狂的に神を信じたということではなく、自分自身の生きざまの中に、神という存在があったのだと思います。

仲道 ラフマニノフの曲は、倍音の効果もあって、ピアノという楽器の中から本当に鐘の響きが聞こえてくるのですね。その響きの中に、いま先生が言われた神へ繋がる何かを聴いていたのではないかという気がしてきました。ドビュッシーは神との関係ではいかがでしょうか。

松橋 ドビュッシーは信仰心が薄かったので、宗教的な意味合いの曲はまったくないと言っているかもしれませんが、ただ、いま倍音のお話が出ましたが、〈カノープ〉の最後では、和音の上の高いところで細かく動きますよね、あれはゴングのような音を下で鳴らしておいて、上の旋律が倍音になっているといった考え方もあります。それをドビュッシーが意図したのならば、ものすごく微細な耳を持っていたことになります。実際鳴っているピアノの音ではない音も聴いていたようにさえ感じます。

仲道 ドビュッシーの耳はすごいと思います。音の質感や倍音の違いを表出させるところは他に例を見ない。ドビュッシーはピアノを支配し、見えないものも物質として表現する。幻想の物質化ですね。

松橋 カノープというのは、エジプ

トのミイラの内臓を入れる壺。ドビュッシーはその頭部を机に2つも置いていたと言います。おそらくそういうものを見たときに何か閃くものがあるのでしょうね。

仲道 ドビュッシーはオリエンタルなことにも興味があるし、南のスペインやイタリアにも目を向けている。

松橋 自分の中に境界を作っていないですね。音、響きに関しては国境がなかった。

亀山 その点で言うと、ラフマニノフはかなり狭いですね。先ほどピアノでの鐘の響きのお話がでしたが、私は2018年に彼の故郷のノヴゴロドを訪問しました。彼自身が幼いころ聴いていた鐘の音を聴くと、前奏曲の〈鐘〉のような荘厳な響きではないのですね。言ってみれば、大きな鈴のような軽やかに鳴りわたる鐘。前奏曲の〈鐘〉は、彼のノスタルジーを喚起するような鐘の響きではない。むしろどこか「世界の終わり」を予感させるような荘重な響きを奏でていきます。いずれにせよ、大小の鐘の響きの向こうに、永遠性や神に近いものを感じとることができた。だからこそそのモチーフにこだわったということなのでしょう。

仲道 それで思うのは、ロシアの演奏法の伝統というものが厳然とあるということです。例えばOp.23の5なども、怖いような、まるで軍隊を彷彿させるような演奏もあります。その中で、私はどうアプローチすべきかと考えてきました。でもラフマニノフ自身の録音を聴くと、鋼鉄のような、威圧的な演奏ではないのですよね。

亀山 そうですね。また彼には、絶

対自分は認められないというある種の“自信”があった。自分は時代から完全に浮き上がっている、離れているという自覚があった。やろうと思えばできるけれども、自分の信念で、時代の流れに沿う、おもねるという考えではやらないだけなのだ。

仲道 それもたらず孤独と強さですね。Op.23の5もロシア的な鋼鉄ではなく、ラフマニノフの中にある不屈の精神とも思えてきます。今回ラフマニノフは、Op.23から3曲、Op.32から6曲、そしてOp.3-2〈鐘〉というプログラムにしましたが、これは私は「ロシアの物語」であるように思っています。悲哀の物語です。ラフマニノフは、音楽とは何かを問われた時、それは「心から心へ向かうもの」、「それは愛」、そして「その母は〜悲哀」と語ったそうです。5年前にシリーズ全体のプログラムを組んだときには、作品番号通りに〈鐘〉を最初に置こうと思っていたのです。けれど、ロシアのウクライナ侵攻という現実、そしてロシアやラフマニノフにおける鐘というものの意味合いを考えたとき、最後に〈鐘〉の響きを聴いて終わることが大切だと思うようになりました。その〈鐘〉の響きの中に何を感じることができるのか。今本当に弾きたい曲になっています。



仲道郁代 The Road to 2027 リサイタル・シリーズ

秋のシリーズ

ピアノという楽器を
味わい尽くすプログラムが
並びます。
より限定された
“親密な”空間で、
ピアノの表現の多彩さ、
細やかさを
味わっていただく
シリーズです。

2018

ショパン ～プレイエルの響き～

ショパン：バラード第1番 Op.23
ショパン：バラード第2番 Op.38
ショパン：バラード第3番 Op.47
ショパン：バラード第4番 Op.52
ショパン：24の前奏曲 Op.28

2019

シューマンの夢

シューマン：アレグロ Op.8
シューマン：幻想小曲集 Op.12
シューマン：予言の鳥 Op.82-7
シューマン：ピアノ・ソナタ第1番 Op.11

2020

ドビュッシーの見たもの

ドビュッシー：前奏曲集 第1巻
ドビュッシー：映像 第1集
ドビュッシー：映像 第2集
ドビュッシー：喜びの島



『ドビュッシーの見たもの』
ライブ・レコーディングCD
好評発売中

2021

幻想曲の模様 ～心のかげらの万華鏡～

ブラームス：2つのラプソディ Op.79より第1番
シューマン：クライスレリアーナ Op.16
ショパン：幻想曲 Op.49
スクリャービン：12のエチュード Op.8より
第1番、第12番
スクリャービン：幻想曲 Op.28

令和3年度
文化庁芸術祭
「大賞」
受賞

2022

前奏曲 ～永遠への兆し～

ドビュッシー：前奏曲集 第2巻
ラフマニノフ：前奏曲集 Op.23より
第2番、第5番、第7番
ラフマニノフ：前奏曲集 Op.32より
第2番、第5番、第8番、第10番、第11番、第12番
ラフマニノフ：前奏曲「鐘」Op.3-2

本公演

2023

ブラームスの想念

ブラームス：7つの幻想曲 Op.116
ブラームス：3つの間奏曲 Op.117
ブラームス：6つの小品 Op.118
ブラームス：4つの小品 Op.119

2024

シューベルトの心の花

シューベルト：4つの即興曲 D899 Op.90
シューベルト：4つの即興曲 D935 Op.142

2025

ラヴェルの狂気

ラヴェル：鏡
ラヴェル：水の戯れ
ラヴェル：夜のガスパール

2021年 秋のシリーズ
「幻想曲の模様」
東京文化会館小ホール



2026

組曲～調和と心慮～

グリーグ：組曲「ホルベアの時代より」Op.40
バッハ：パルティータ第2番 BWV826
バッハ：イタリヤ協奏曲 BWV971
バッハ：パルティータ第1番 BWV825
ラヴェル：クーブランの墓

2027

変奏曲 ～生の命題を編む～

モーツァルト：フランスの歌
「ああ、お母さん聞いて」による12の変奏曲
(きらきら星変奏曲) K.265
シューマン：アベッグ変奏曲 Op.1
ラフマニノフ：コレリリの主題による変奏曲 Op.42
ベートーヴェン：創作主題による32の変奏曲
WoO.80
ブラームス：ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ Op.24

秋のシリーズ

「実体のあるものも、ないものも音に変換されてそこにあるかのよう
に立ち昇る……」、と仲道郁代さんはドビュッシーの本質を
語っています。その演奏は、言葉通りに、作曲家が音に込めた微細な
気配までも見事に映し出していました。音楽へのこの深い感応力が、
ショパンやシューマンの魂の哀しみに、シューベルトやブラームスの
真摯なひたむきさに、スクリャービンの色彩にみちた神秘に、ラフマ
ニノフの抒情の劇性に、ラヴェルの粋な佇まいの裏に隠された真実に
……光を当ててくれることでしょう。

松橋麻利 (音楽学者・ドビュッシー研究家)



2020年 秋のシリーズ
「ドビュッシーの見たもの」
東京文化会館小ホール



春のシリーズ

2022年 春のシリーズ
「知の泉」
サントリーホール

音楽を哲学的に探求するシリーズです。ベートーヴェンの
ピアノ・ソナタを核に据え、ベートーヴェン以前・以後の作品と
ともに各回のテーマに迫ります。

2018

パッションと理性

モーツァルト：ピアノ・ソナタ K.310
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ
第17番「テンペスト」Op.31-2
ショパン：バラード第1番 Op.23
ブラームス：ピアノ・ソナタ
第3番 Op.5

2019

悲哀の力

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ
第8番「悲愴」Op.13
ブラームス：8つのピアノ小品 Op.76
シューベルト：ピアノ・ソナタ
第19番 D958

2020

音楽における十字架

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第22番
Op.54
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第21番
「ワルトシュタイン」Op.53
ショパン：2つのノクターン Op.48
シューマン：ピアノ・ソナタ第3番 Op.14

※2028年に延期

2021

幻想曲の系譜 ～心が求めてやまぬもの～

モーツァルト：幻想曲 K.475
シューマン：幻想曲 Op.17
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第28番 Op.101
シューベルト：さすらい人幻想曲 D760 Op.15

2022

知の泉

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ
第17番「テンペスト」Op.31-2
ショパン：バラード第1番 Op.23
リスト：ダンテを読んで S.161-7
ムソルグスキー：組曲「展覧会の絵」

2023

劇場の世界

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第19番 Op.49-1
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第20番 Op.49-2
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第18番 Op.31-3
シューマン：パピヨン Op.2
シューマン：謝肉祭 Op.9

次回
公演



2025

高雅な踊り

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第24番「テレゼ」Op.78
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第25番 Op.79
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第26番「告別」Op.81a
リスト：メフィスト・ワルツ
第1番「村の居酒屋での踊り」S.514
ラヴェル：優雅で感傷的なワルツ
ショパン：ワルツ「告別」Op.69-1
ショパン：ワルツ Op.64-2
ショパン：ポロネーズ第6番「英雄」Op.53

2026

音楽の哲学

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第30番 Op.109
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第31番 Op.110
シェーンベルク：6つの小さなピアノ曲 Op.19
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第32番 Op.111

2027

生と死の揺らぎ

ショパン：ピアノ・ソナタ第2番「葬送」Op.35
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第29番
「ハンマークラヴィア」Op.106

仲道郁代オフィシャル
You Tubeチャンネル

オフィシャルYouTube
チャンネルでは本公演
に先立って行われた亀

山郁夫氏、松橋麻利氏との鼎談「前奏
曲～永遠への兆し」の動画を公開し
ています。どうぞご覧ください。

その他、「仲道郁代 The Road to
2027」のコンサートのダイジェスト
映像や、本人による曲目のアナリーゼ、
対談など、仲道郁代の世界をより深く
味わっていただくためのコンテンツを
公開中。ぜひお楽しみください。





CFX

Yamaha Concert Grand Piano

私と、響き合う。

旬のピアニスト情報が満載

ピアニストラウンジ

検索

Pianist Lounge.

<https://jp.yamaha.com/sp/pianist-lounge/>

株式会社ヤマハミュージックジャパン

仲道郁代の名盤 @RCA RED SEAL

Sony Music Japan
International



ドビュッシーが心に投影した
理想の響きがここに。



最新録音

**ドビュッシーの見たもの
前奏曲集I・映像I/II・喜びの島**
ハイブリッドディスク

● SICC 19053 ¥3,300 (税込)

仲道郁代が辿る、深遠かつ多様な
ベートーヴェンの音世界。



17枚組 | 完全生産限定

**仲道郁代ベートーヴェン集成
～ピアノ・ソナタ&協奏曲全集**

12CD+3ハイブリッドディスク+2DVD

● SICC 39032~48 ¥19,800 (税込)

仲道の「音楽の故郷」、
シューマンへの帰還。



シューマン：ファンタジー
ハイブリッドディスク

● SICC 19008 ¥3,300 (税込)



**アラベスク～
ドビュッシー・
ソロ・ピアノ作品集**

録音：1997年
CD ● BVCC 766
¥2,990 (税込)



**celeste
仲道郁代愛奏曲集**

録音：1989年～2005年
CD ● BVCC 34162
¥2,640 (税込)



永遠のショパン

録音：2015年他
CD+DVD
● SICC 9002~3
¥3,056 (税込)



食と音楽 豊かな味わい。

いつの時代も、音楽は人の心を動かし
人生を豊かにしてきた。

私たちハウス食品グループは、
心躍る音楽のように、
食を通じて、たくさんの笑顔をつくりたい。
人と笑顔をつなぐ、
皆さまのグッドパートナーを目指して。



暮らしを彩る、レイノーの輝き。

1849年、フランスリムーージュ地方で生まれたレイノー。
創業以来、フランスを始め世界各国の王室や著名なレストランと
共に歩んできました。エレガントな輝きとこだわりのデザインは、
今も多くの人々から愛されています。

ERCUIS RAYNAUD

エルキュイ・レイノー 青山店

東京都港区北青山3-6-20 KFIビル2F Tel.03-3797-0911
<https://housefoods.jp/shopping/ercuis-raynaud/>
ハウス食品グループ本社株式会社は、レイノー社製品の総輸入販売代理店です。

ホームページは
こちらから



食でつなぐ、人と笑顔を。

 **House** ハウス食品グループ

The Road to 2027

仲道郁代ピアノ・リサイタル「前奏曲—永遠への兆し」
2022年10月29日(土) 開演14:00 東京文化会館 小ホール

主催：ジャパン・アーツ

協賛： **House** ハウス食品グループ

協力：ソニー・ミュージックジャパンインターナショナル/ヤマハミュージックジャパン

発行：有限会社オフィス・ナカミチ
デザイン：三木和彦/株式会社アンバサンドワークス
編集：北川由子/有限会社オフィス・ナカミチ
表紙写真：ヒダキトモコ
制作：ジャパン・アーツ